CAIシンポジウム、2023/2/4　Zoom配信

「アレルギー疾患のチーム医療 ～CAI・PAEの育成と融合～」

アレルギー診療における多職種連携のポイント
～　うまくいったこと、うまくいかなかったこと　～

小児科が比較的マイナーな存在の総合病院での
多職種連携の経験についてお話しいたします

2019年の日本小児臨床アレルギー学会にて

INTERNATIONAL UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

CHIBA UNIVERSITY

日本アレルギー疾患療養指導士認定機構

発表者名： 山出史也

演題発表内容に関連し、発表者に開示すべき
COI 関係にある企業などはありません。

アレルギー診療における多職種連携

アレルギー診療における多職種連携は、
医療的側面でも社会的側面でも非常に重要・有用

- マンパワーを割くための診療報酬が手薄
- そもそも多忙な診療業務の中で、どのように
  - ✓ メンバー・仲間を増やしていくか
  - ✓ 自身やメンバーのモチベーションを維持するか
  - ✓ 連携を継続するか

多職種連携で大切だと思うこと

- 『目的・意義の提示・共有』は大切
- 多職種でも・同一職種内でも対等な関係、個々のスキルを活かしながら協力

  単なる”丸投げ”でもなく、完全な”指示出し”でもなく
- 連携・チームといっても、思いはそれぞれ（個々人の思いが大切）
- 『きっかけ』も大切（気づく・行動を起こす・継続する・つながるなど）
- 『無理』は長くは続かない

  それぞれのメンバーに、“楽しさ”・“喜び”などがあることが継続の鍵

  （患児の軽症化、患児・家族のQOL改善、達成感、評価や報酬　など）

  ※　外からの働きかけ（インセンティブ、評価）よりも、自分自身で興味・喜びなどを見いだせていける方がよい
- 『完璧』でなくてもよい

  その施設・状況の中で実施可能なよりよい方法を考える
- 門戸を広くする
- コアとなるメンバーを作れるとさらにスムーズ

多職種連携という以前に

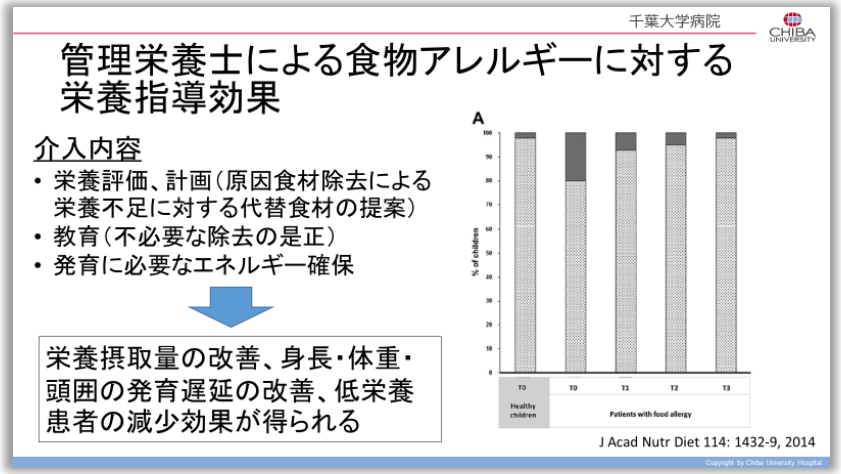
日頃、心がけていること

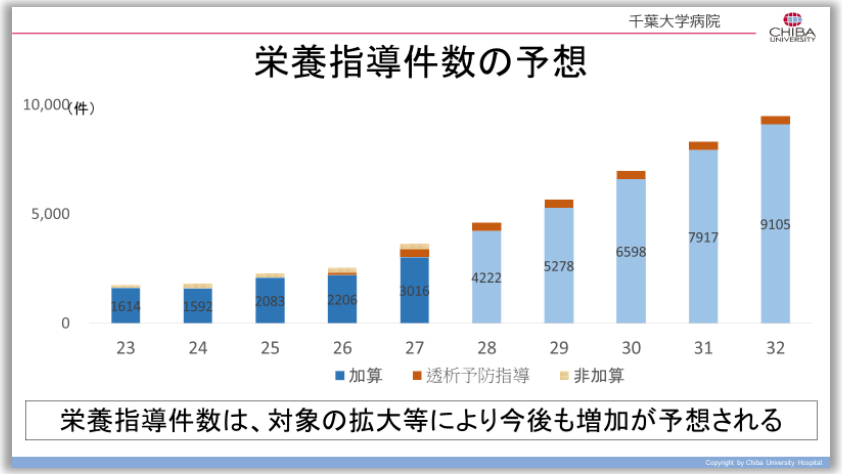
うまくできているかは
あれですが。。。

- いろいろな人とコミュニケーションをとる
- 周囲とのよい関係を構築して、良い関係を続ける
- “お互いをリスペクト・尊重する” 気持ちを大切にする
- いろいろな場面で『皆と一緒にやりたいんだ！』ということを表に出す
- どうせやるなら、“楽しく”・“仲良く”やりたい
- 活用/利用可能なもの・機会・コネクションはなんでもつかう

管理栄養士を小児アレルギー外来へ

- 2016年度栄養指導診療報酬改定
  - ✓ 算定点数の大幅な増額：　130点　⇒　初回260点、2回目以降200点
  - ✓ 対象の大幅な拡大：　従来の対象に、低栄養や摂食・嚥下障害も追加
- 臨床栄養部の方々と一緒に、小児アレルギー外来患者数の推移、見込める栄養指導件数、そこからの収益見込みなどのデータを、作成し、院長にプレゼン





◆要求理由
現体制、再開発による中長期の計画（診療規模の拡大、機器の増設、業務量の増等）について、当該年に増員が必要な理由をできるだけ具体的に記載して下さい。（参考資料も別途添付可）
（※当該増員の人件費を病院経費以外（外部資金等）で充当する予定であれば、その旨記載願います。）

①平成28年（4/1付けの増員。以下同じ。）　増員数　1　人

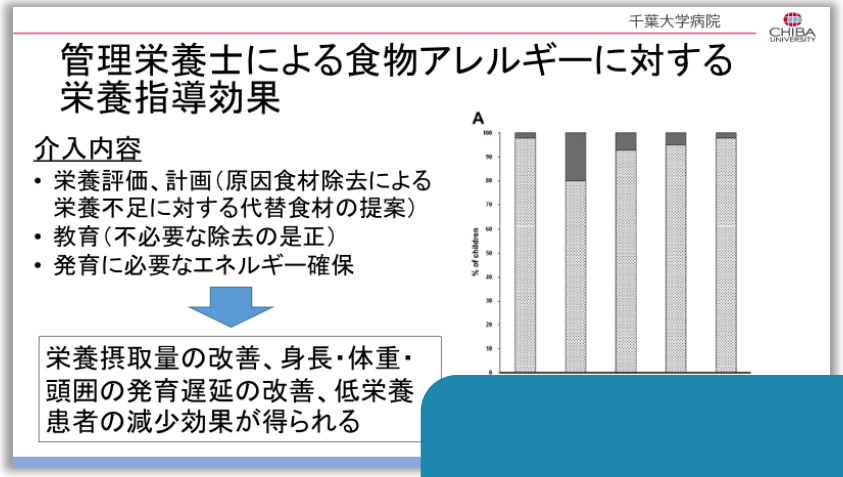
○主な理由
■ 診療規模の拡大　□ 機器の増設　■ 業務量の増　□ その他（簡記：　）

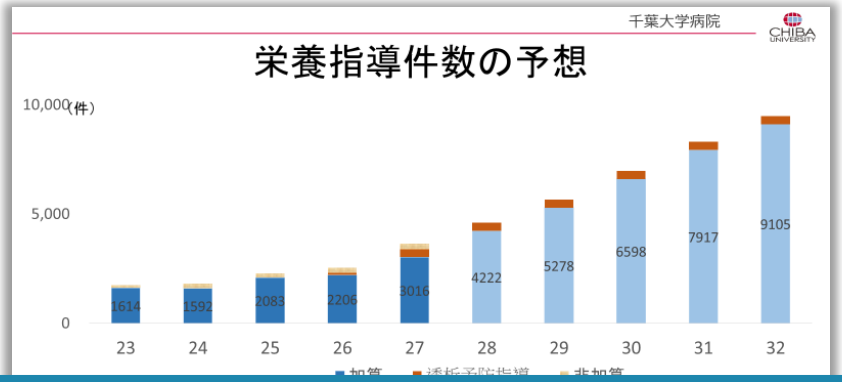
○具体的な理由
食物アレルギーの有病率は乳児で約10%、幼児で約5%、学童期以降で3%程度とされ、患児数の多い疾患である。現在、食物アレルギー患児に対する食事療法としては、栄養面やQOLなどを考慮し、「必要最小限の除去」が推奨されており、継続的な栄養評価ならびに栄養指導が必要とされている。食物アレルギー患児に対する外来栄養食事指導料は、9歳未満の小児に対し、概ね15分以上の時間をかけ管理栄養士による指導を行うことで、月1回算定することができる（初回月に限り月2回算定可能）。
当科で診療する食物アレルギー患児は、診療所や県内外の一般病院小児科から紹介される重症の食物アレルギー患児であるが、当科外来への、昨年度1年間の15歳以下の食物アレルギー患児受診数は約2000件となっている（なお、9歳未満の児は約1500件）。当科受診患児に対する、栄養指導は現在、適宜実施しているところであるが、栄養指導枠が他科や他疾患での指導とあわせて1日9枠（45分）であること、ならびに、当科でのアレルギー外来日（木曜日）に受診が集中していることなどから、十分には、管理栄養士による栄養指導を行えていないのが現状である。そのため、栄養指導は、アレルギー専門医等、アレルギー外来担当医師が外来中に行っており、外来患者数の増加制限にも影響を与えている。
上記を鑑み、小児科外来にて、直接、管理栄養士からの栄養指導を行えるようになれば、必要としている食物アレルギー患児に対する栄養指導が適切に行えるとともに、アレルギー外来担当医による診察患者数増加にも寄与することが期待されることから、管理栄養士の増員を希望する。

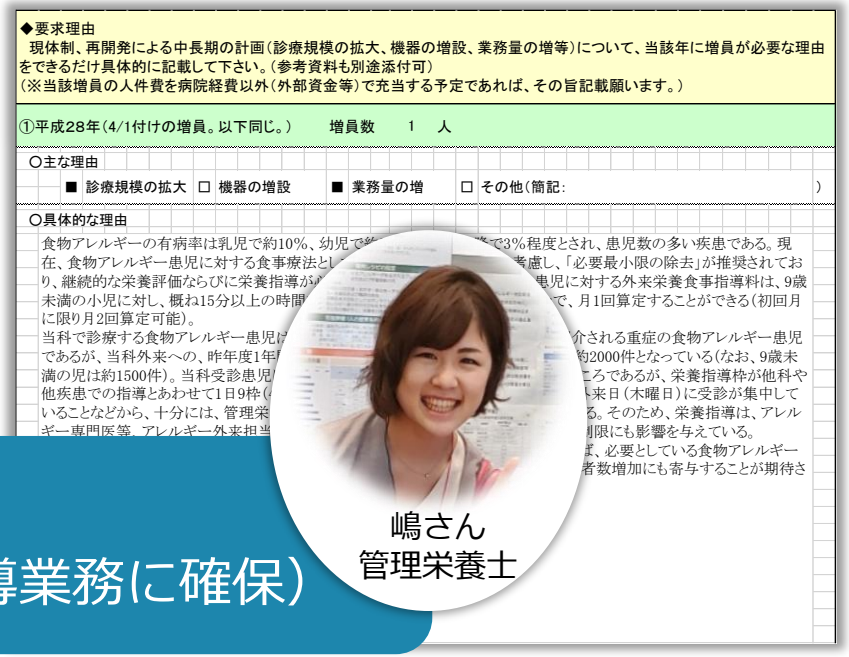
管理栄養士を小児アレルギー外来へ

多職種連携の中でも、特に管理栄養士のスキルは、医師含めて他の職種とは大きく異なり、
食物アレルギー診療や低年齢のアレルギー児の診療などでは重要

- 臨床栄養部の方々と一緒に、小児アレルギー外来患者数の推移、見込める栄養指導件数、そこからの収益見込みなどのデータを、作成し、院長にプレゼン







嶋さん
管理栄養士

小児科担当管理栄養士　1名
（週5時間程度の小児アレルギー外来での栄養指導業務に確保）

PAE看護師を小児アレルギー外来へ

遠藤さん
看護師

中嶋さん
看護師

湯口さん
看護師

2013年　看護師　遠藤さん・中嶋さん　PAE取得

2014年　小児科看護師向け勉強会開催
　　看護師　湯口さん　PAE取得

師長に、“入院患者指導”や“勉強会開催”などでアピールしつつ『外来患者もみていきたい』希望を相談

⇒　病棟業務の合間での外来指導開始（2人、11件）

2015年　多職種向け院内勉強会

⇒　年度途中から小児アレルギー外来日には、外来勤務に変更（12人、52件）

※ はじめのうちは肩身が狭かったようです。。。

PAE看護師を小児アレルギー外来へ

遠藤さん
看護師

中嶋さん
看護師

湯口さん
看護師

<u>小児アレルギー外来で活動することに際した周囲への配慮</u>

- 医師からの指示・依頼がでて活動していることがわかるように、医師にカルテなどに記載してもらう

- 患者からのニーズが高いこと
- 患者の症状、QOLが改善していること
- アウトカムの共有、やってることをできるだけ見える化

※ 「患者さんのQOLの改善、セルフケアの促進」に向かう小さいアウトカム（この患者さんがこうよくなったよ etc）をこまめに報告

※ 病棟で後輩がアレルギー患児を受け持つときのフォローも積極的にかって出て、少しでも「部署にとっても役に立つ存在」をアピール

PAE看護師を小児アレルギー外来へ

遠藤さん
看護師

中嶋さん
看護師

湯口さん
看護師

<u>小児アレルギー外来で活動することに際した周囲への配慮</u>

- 医師からの指示・依頼がでて活動していることがわかるように、医師にカルテなどに記載してもらう
- 患者からのニーズが高いこと
- 患者の症状、QOLが改善していること
- アウトカムの[illegible]る化

※ 「患者さ[illegible]かう小さい[illegible]etc）をこま[illegible]

※ 病棟[illegible]フォローも積極的にかっ[illegible]も役に立つ存在」をアピール

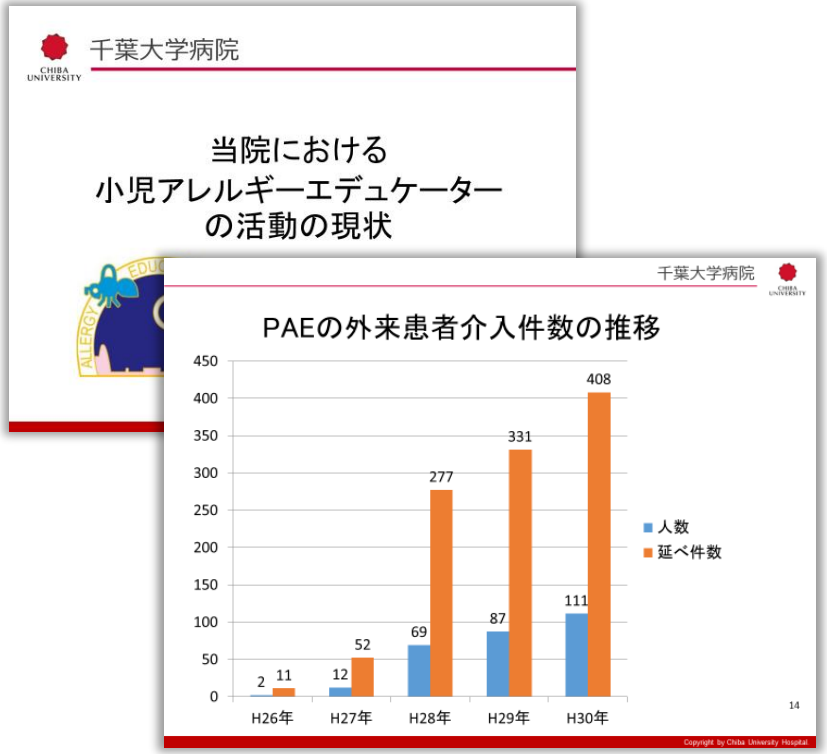
活動開始当初は、周囲の看護師から、活動内容が理解されにくく、「PAEが勝手にいろいろやってて、看護業務が回らない」と受け取られてしまう懸念??

PAE看護師を小児アレルギー外来へ

遠藤さん
看護師

中嶋さん
看護師

湯口さん
看護師



2017年　病院全体への活動報告会（PAE指導実績）

⇒　看護副部長クラスまで「PAE」の認知が拡大

看護師取得資格の記載用紙に「PAE」欄も追加

⇒　PAE活動への認識・理解が深まることで、他の外来スタッフからの協力もスムーズに

⇒　安定して活動・指導できるように

石井さん
看護師

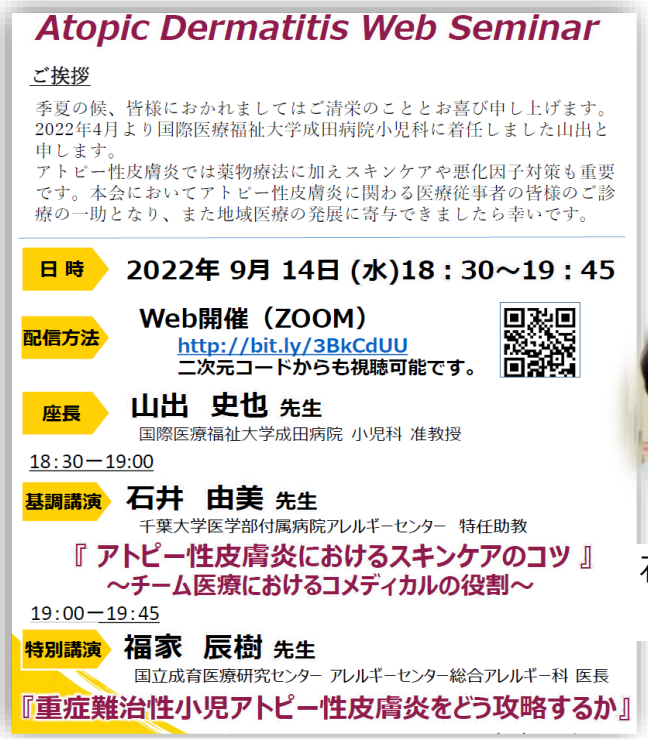
2018年　千葉大がアレルギー疾患医療拠点病院に
2019年　看護師PAE　石井さんアレルギーセンターへ
院内活動報告会（PAE・拠点病院活動）

病院内でのプレゼンスを確立

看護師の方々と診療以外でも

- 院内勉強会の開催
- 臨床研究・大学院研究・学会発表・論文作成
- 講習会・講演会の情報提供や推薦状作成

・・・



Atopic Dermatitis Web Seminar

ご挨拶

季夏の候、皆様におかれましてはご清栄のこととお喜び申し上げます。2022年4月より国際医療福祉大学成田病院小児科に着任しました山出と申します。
アトピー性皮膚炎では薬物療法に加えスキンケアや悪化因子対策も重要です。本会においてアトピー性皮膚炎に関わる医療従事者の皆様のご診療の一助となり、また地域医療の発展に寄与できましたら幸いです。

日時　2022年 9月 14日 (水)18：30～19：45

配信方法　Web開催（ZOOM）
http://bit.ly/3BkCdUU
二次元コードからも視聴可能です。

座長　山出　史也 先生
国際医療福祉大学成田病院 小児科 准教授

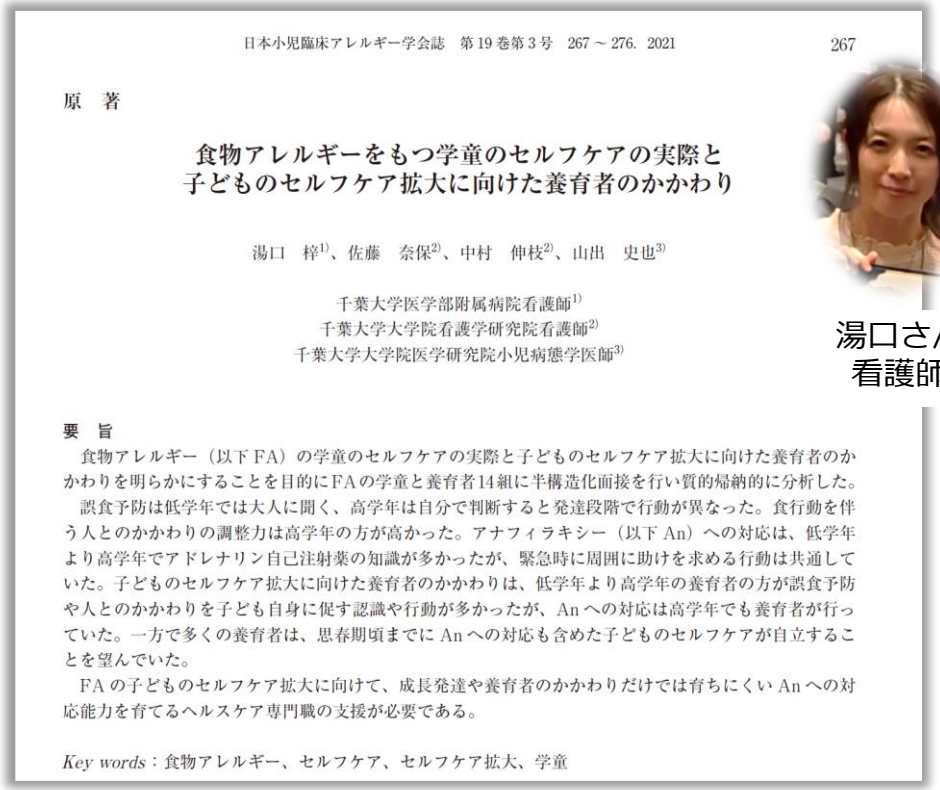
18:30ー19:00

基調講演　石井　由美 先生
千葉大学医学部付属病院アレルギーセンター　特任助教
『 アトピー性皮膚炎におけるスキンケアのコツ 』
～チーム医療におけるコメディカルの役割～

19:00ー19:45

特別講演　福家　辰樹 先生
国立成育医療研究センター アレルギーセンター総合アレルギー科 医長
『重症難治性小児アトピー性皮膚炎をどう攻略するか』

石井さん
看護師



日本小児臨床アレルギー学会誌　第19巻第3号　267～276. 2021　267

原　著

食物アレルギーをもつ学童のセルフケアの実際と
子どものセルフケア拡大に向けた養育者のかかわり

湯口　梓[1)]、佐藤　奈保[2)]、中村　伸枝[2)]、山出　史也[3)]

千葉大学医学部附属病院看護師[1)]
千葉大学大学院看護学研究院看護師[2)]
千葉大学大学院医学研究院小児病態学医師[3)]

要　旨

食物アレルギー（以下FA）の学童のセルフケアの実際と子どものセルフケア拡大に向けた養育者のかかわりを明らかにすることを目的にFAの学童と養育者14組に半構造化面接を行い質的帰納的に分析した。

誤食予防は低学年では大人に聞く、高学年は自分で判断すると発達段階で行動が異なった。食行動を伴う人とのかかわりの調整力は高学年の方が高かった。アナフィラキシー（以下An）への対応は、低学年より高学年でアドレナリン自己注射薬の知識が多かったが、緊急時に周囲に助けを求める行動は共通していた。子どものセルフケア拡大に向けた養育者のかかわりは、低学年より高学年の養育者の方が誤食予防や人とのかかわりを子ども自身に促す認識や行動が多かったが、Anへの対応は高学年でも養育者が行っていた。一方で多くの養育者は、思春期頃までにAnへの対応も含めた子どものセルフケアが自立することを望んでいた。

FAの子どものセルフケア拡大に向けて、成長発達や養育者のかかわりだけでは育ちにくいAnへの対応能力を育てるヘルスケア専門職の支援が必要である。

Key words：食物アレルギー、セルフケア、セルフケア拡大、学童

湯口さん
看護師

2019年 日本小児臨床アレルギー学会
優秀演題賞受賞

INTERNATIONAL UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

CHIBA UNIVERSITY

管理栄養士の方々と診療以外でも積極的に協働

臨床研究・学会発表・論文作成

日本小児臨床アレルギー学会誌　第19巻第3号　283～288．2021　283

報　告

食物アレルギー患児におけるアレルゲン定期摂取を促す管理栄養士の支援

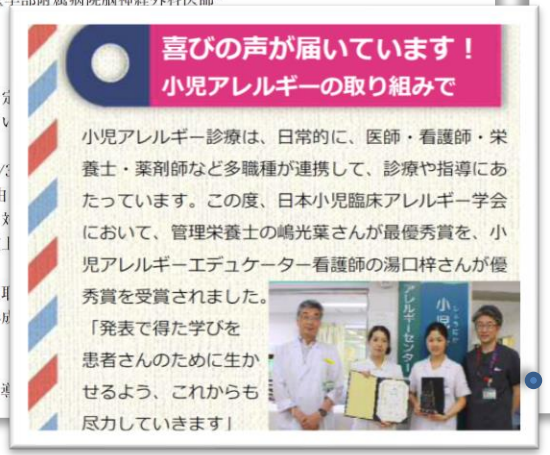
嶋　光葉[1)]、山出　史也[2)]、佐藤　由美[1)]、野本　尚子[1)]、
古川　勝規[1,3)]、下条　直樹[2)]、岩立　康男[1,4)]

千葉大学医学部附属病院　臨床栄養部管理栄養士[1)]
千葉大学医学部附属病院小児科医師[2)]
千葉大学医学部附属病院肝胆膵外科医師[3)]
千葉大学医学部附属病院脳神経外科医師[4)]

嶋さん
管理栄養士

にする効果的な支援方法は明らかにされて
援のポイントを検討した。
栄養食事指導を受けた患児・家族の約1/
食材の見た目や味、匂いが嫌いという理由
が、小麦では量が多く飽きるという理由に
支援が無効な症例では偏食や小食等食習慣
なった。
アレルゲン定期摂取を促すためには、摂
の支援が必要であり、望ましい食習慣の形
えられた。

Key words：食物アレルギー、栄養食事指



喜びの声が届いています！
小児アレルギーの取り組みで

小児アレルギー診療は、日常的に、医師・看護師・栄養士・薬剤師など多職種が連携して、診療や指導にあたっています。この度、日本小児臨床アレルギー学会において、管理栄養士の嶋光葉さんが最優秀賞を、小児アレルギーエデュケーター看護師の湯口梓さんが優秀賞を受賞されました。「発表で得た学びを患者さんのために生かせるよう、これからも尽力していきます」

日本小児臨床アレルギー学会誌　第18巻第2号　79～88．2020　79

原　著

牛乳アレルギー児の嗜好の現状と乳製品摂取支援レシピへの応用

佐藤　法子[1)]、山出　史也[1)]、原　正美[2,3)]、下条　直樹[1)]

千葉大学大学院医学研究院小児病態学医師[1)]
京都光華女子大学健康科学部健康栄養学科管理栄養士[2)]
昭和女子大学大学院生活機構研究科生活科学研究専攻管理栄養士[3)]

佐藤さん
小児科医

昭和女子大学
原先生
管理栄養士

るアレルギー児に対する免疫療法や栄養食事指導では、しばしば嗜
る。対策として、本研究では嗜好調査とレシピ開発を行った。
【方法】牛乳アレルギーの既往があり、現在は牛乳200 mL程度を摂取可能となった
た。牛乳の摂取状況や嗜好を調査し、嗜好を考慮した乳成分含有メニューを
した。非アレルギー児を対照群とし、一般小児における牛乳の嗜好も調査した。
【結果】対象児49名（年齢中央値：10歳8か月）中、46名は牛乳の免疫療法を経験していた。乳製品は牛乳より好まれ、牛乳が「嫌い」な児の牛乳摂取開始年齢は「好き」な児よりも有意に高かった（中央値：各8歳、5歳、$p<0.05$）。試食会では、児はかすかな牛乳・乳製品の味やにおいも敏感に感じ取り、摂取の妨げとなっていた。
【まとめ】牛乳の摂取開始年齢は嗜好に影響し、早期の摂取開始が牛乳嫌いの回避に役立つ可能性が示唆された。調理の際は、牛乳・乳製品の味やにおいを低減する工夫等が重要である。

Key words：アンケート調査、牛乳アレルギー、嗜好、味覚、レシピ

2019年 日本小児臨床アレルギー学会
最優秀演題賞受賞

院内の広報誌に掲載！
小児アレルギーの取り組みをアピール！

CHIBA UNIVERSITY

昭和女子大学
SHOWA WOMEN'S UNIVERSITY

興味をもつ・重要だと思う“きっかけ”

千葉大小児科では、やる気があり・スキルの高い方がたくさんいて、
皆さんの活動のお陰もあり、周囲のスタッフもいろいろな“きっかけ”を得ている

✓「勉強会・研修会」に誘い・参加し、知識・スキルを身につけて

⇒　興味・モチベーション UP! UP!

✓得た知識・スキルを実際の臨床の場での実践機会を作り・実践して

⇒　さらに興味・モチベーション UP! UP! UP!

✓経験をいろいろな場で発表・共有して

⇒　さらに興味・モチベーション UP! UP! UP

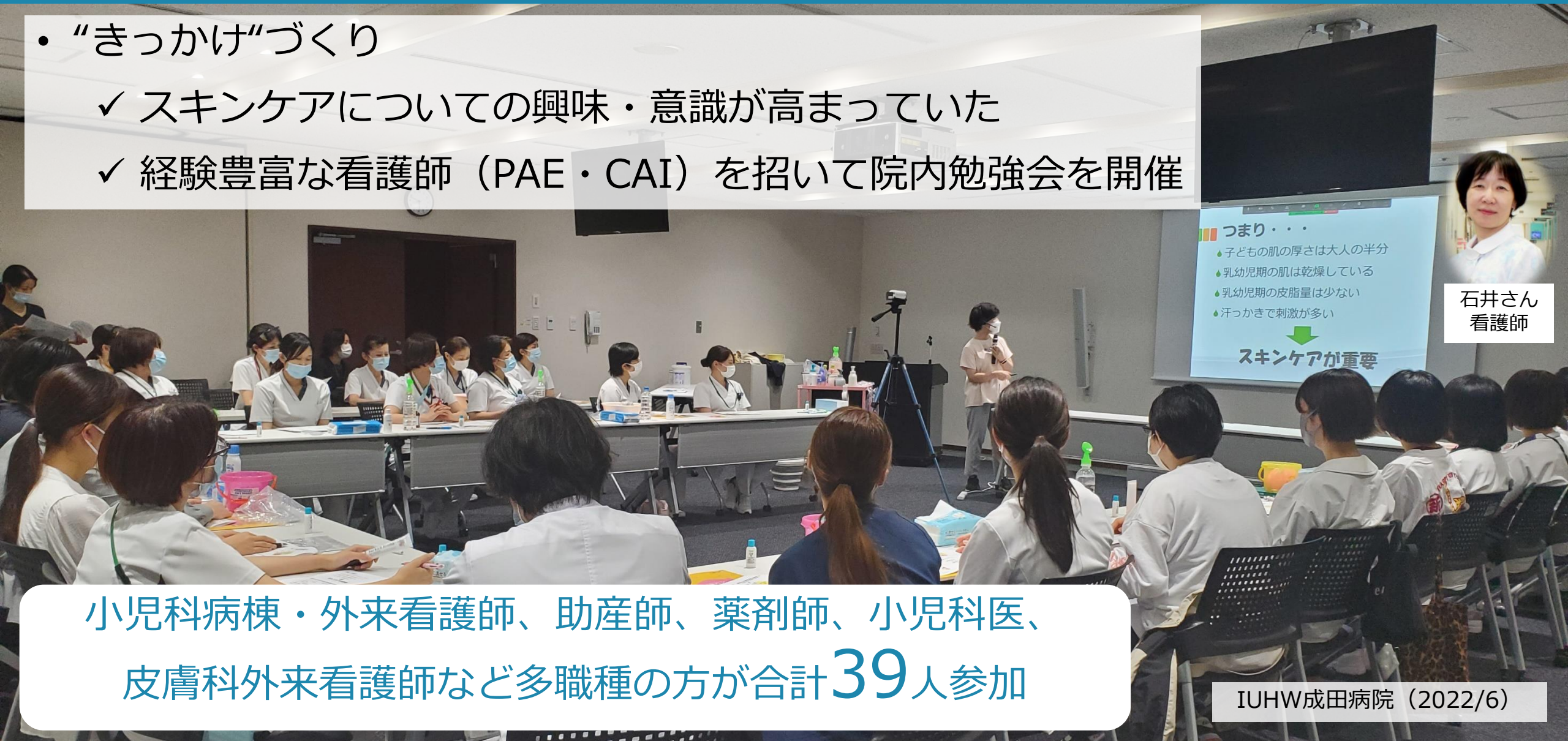
千葉大小児科での
アレルギー多職種連携
の強み

※　”達成感・スキルアップ”、“正当な評価”

※　つまづく場面では、”サポート・フィードバック”も

一緒に診療する仲間をふやしたい

- “きっかけ”づくり
  - ✓ スキンケアについての興味・意識が高まっていた
  - ✓ 経験豊富な看護師（PAE・CAI）を招いて院内勉強会を開催



石井さん
看護師

小児科病棟・外来看護師、助産師、薬剤師、小児科医、
皮膚科外来看護師など多職種の方が合計39人参加

IUHW成田病院（2022/6）

看護師・薬剤師から

- 看護師から、小児アトピー外来開設の提案（看護師が時間を取りやすい曜日で）
- CAI希望者（薬剤師、看護師）

千葉大学病院で（もっとやれると思うけど）
うまくできていないこと。。。

- 薬剤師との連携があまりできていない。。。

  入院患者へ薬剤指導を実施いただく場合もあるが、フィードバックやDiscussionは行えていない

  ⇒　入院・外来でも小児患者は小児科看護師（PAE）に対応頂いている

  ※　薬剤師ならではのスキル・知識などもあるので、今後さらに連携が進めていけるのが望ましい

- 多職種連携の起点を多く作れていない。。。

  千葉大病院ではスキルフルな看護師や管理栄養士が、小児アレルギーの多職種連携で中心となって活躍しているが、どうしても連携の起点が“小児科医”となっていて、主治医が必要性を認識しないと連携に進みにくい

  ⇒　多職種連携・介入が必要/改善が期待できる症例が漏れている

  ⇒　患者・家族への“多職種連携チーム”があることの案内
  多職種連携支援につながる“スクリーニング手法”を作る

国際医療福祉大学成田病院で

これからやっていきたいこと

【現状】

- 看護師や薬剤師の小児アレルギー指導という点でのスキルはこれから磨く
- 管理栄養士との連携はまだあまりできていない
- 多診療科連携（アレルギーで有名な先生方も多数在籍）もできていない　などなど

【当院に来て感じたころ】

✓小児看護師も助産師も薬剤師も積極的

✓小児科医も皆、専門外の診療・情報を学ぶ意欲が大きい

⇒　いろいろな方とコミュニケーションをとって知り合いになる
看護師・薬剤師など多職種の方のモチベーションが維持できるようなサイクルを作っていく

まずは できることから こつこつと

多職種連携のポイント

～ “興味・モチベーションの維持・実践”サイクル ～

機会・きっかけ

“楽しさ”・“喜び”

実践場面での支援

つまづく場面では
”サポート・フィードバック”

正当な評価サポート

対等な関係・お互いを尊重
個々のスキルを活かしながら協力

喜び・達成感・充実感・報酬

周囲への感謝も忘れずに！

単なる”丸投げ”でもなく
完全な”指示出し”でもなく

管理者や周囲へ多職種連携の実績・数字・データをもとにきちんとアピール！